

久松潜一著

年々去来

田中重太郎

本書はわが国文学の泰斗であり、昭和四十一年まで十年近く本学に集中講義をせられた久松潜一博士の随想集である。

本書のサブタイトルに「一国文学徒の思出」とあるが、文化功労賞を受けられた斯学の第一人者の、謙虚にしてこよなく御誠実なお人がらがよくにじみ出たエッセイである。

その内容を目次によって順に示すと、

1 故人・今人 (一〇一―一三〇頁) には、

「明治の文人・学人——上田万年・芳賀矢一・姉崎嘲風博士——」「思い出の人々——和辻哲郎・津田左右吉・木下杢太郎氏ら——」からはじまって「風巻景次郎君の学問」「池田亀鑑博士の学問」「西下経一博士の学問」など恩師・先輩・知友・教え子などの死を悼み、偲ばれる二十八編の文がならんでいる。これらの中には、もともと追悼文として書かれたものでないものもあるが、昭和四十二年七月現在では、それがすべて著者久松潜一先生のあたたかい、そして、かなしい思い出として綴られている。ところどころに挿入せられている写真には、わたくしどもがお名前だけ聞いていてお目にかかったこともない先生方のお姿やお顔を拝することができてうれしい。五十歳をこえたわたくしでもそうなのだから、若い人々にはこれだけでもありがたい本であろう。円地文字の敵父である上田万年博士をはじめ芳賀矢一・藤村作・橋本進吉・池田亀鑑らの諸博士の写真が載っている。

2 幼時から学窓を出るまで (一三二―一七六頁) は、

著者の故郷愛知県知多半島東浦のことを述べられた「郷里知多」からはじまり小学校の恩師の「重厚さと情熱と」、「わが家の紋章」「一中のころ」「私の受けて来た教育——特に中学校時代の思い出——」「老いた中学生の会」「石村貞吉先生と私」「ゆっくりと、しかし休まずに」「八高のころ」「高校生のころ」「古典文学に目ざめる——私の学生時代とその後——」「大学生のころ」におよぶが、久松博士が旧制中学でマラソンによる心身の鍛錬をせられたことなど興味深く、国文学に志されるようになった博士の動機や過程を教えられて感慨深い章である。

3 教壇生活の思い出 (一七七―二四四頁) には

「私の書齋」「修学旅行——京都と奈良——」「新緑のころ——東大を退いて——」などから「陛下に御進講」「礼宮御命名のいわれ」「国文学四十年」「国文学に生きて」にいたる十六編で、学者として、教育者としての著者の人間像がよくうかがわれる。そこには、東大を御退職なさったときの博士のお歌

野の人となりし朝けを庭に下りうつくし

と見る芽ぶく楓を

があり、著者が四十数年間講義をおつづけにならっている目白の日本女子大学の卒業生に贈られた文の中で、世阿弥の「年々去来の花を忘れず」を引かれ、これに心をひかれて、「これは学ぶものの態度を言ったのであるが、教えるものの態度にもなると思う」と結んでいられる文にあらう。本書の書名の由って来たるゆえんである。著者のお気持がわかるであろう。

4 生活と読書 (二四五―三〇〇頁) は、

「父親(私)の記」からはじまり、「母を思いて」「人の一生」「孫三題——孫の言葉・孫の成長・由伎子への手紙——」「大雅と玉瀾」「老境」「読書遍歴」「わが愛読書」「愛読の書」「万葉集と一中精神」「近代文学館の進展」など十四編から成るが、久松博士の御両親のこと、御家族の構成や御生活がよくわかり、この章にも写真の挿入があつて、読む者へのこよなき親しみをもたらしている。

5 自然と旅 (三〇一―三六六頁) には、

「焼跡の花」「銀杏の黄ばむころ」「隅田川への郷愁」「某月某日」「契沖の墓」「温泉雑感」「年々の花」「花と文学」「正月の思い出」「新年雑感」「早春

雑誌「はまゆうの花」などが収められているが、花を愛される著者のやさしいお心に触れ得てありがたい。この章には「祇園慕情」という一文もあるが、「まこと」の理念を追求せられる博士のそれは、やや学問的である。

……常凡な生き方しか出来ない私であるから、常凡なことしか書けないが、それでもたどって来た七十年を顧みると、人生の哀歓をそれなりに感じて生きて来た。……

(あとがき)

と著者はいわれる。わたくしは、かつて著者の旧著「恩頼抄」からうけたとおなじこの謙虚な著者のおことばからそのお人がらにうたれ、全巻を通じて流れる真実のたつとさに深く感動した。

文学博士であり、文化功労者であり、日本学士院会員であり、東大名誉教授であり、文化財保護委員であり、現在も各大学の教壇に立っていらっしやる、わが国文学界最大の学者の、この随想集を読むことによって、まことにつましやかで、淡々として飾らぬ文章に、そのお人がらをいまさらながら肝銘感激したことを伝えて、あえて新刊紹介の辞にかえ、ひろく大方諸賢に本書をおすすめるとともに、本学で久松先生の講筵につらなつた人たちの必読を念ずる次第である。

B6判 三七八頁。昭和四十二年十月十日刊。広済堂出版 定価四九〇円

竹田加寿男著

## 道徳の指導形態

秦 博

今日道徳教育の方法論の上で、最も大きな論争は、生活主義か、徳目主義かの対立である。この問題は、新しく「道徳」の時間が特設される際に、その必要を認めるかどうかの論争として激しくとり上げられたが、昭和三十三年に、文部省が「道徳」の時間を設けた後に於ても、この授業の運営を如何にするかの実際問題として、今日まで現場の教師達の間で絶えず論議が繰り返されている問題である。この論争に対して理論・實際の両面から実に明快な解決を与えたのが本書である。

著者は、神戸外国語大学の教授であるが、先年テュレーン大学の招聘教授として、同大学院で講義を担当し、其後欧米各国の道徳教育の状況を視察して帰国した、この道のベテランである。この著書の外に「道徳教育の構造」「社会科学教育の根本的改善」等の著作がある。著者は、教育学では J. Dewey を、倫理学では、H. Sidwick を研究した人であるから、その論述も、この思想の上に立っていることは、言うまでもないが、この問題に対する国内の学者達の意見も充分紹介して、これを批判しているし、又欧米諸国の学者の意見も引用し、その上実際教育の状況も視察してこれを報告しているから、現場の実際教育家にとっては、またとない有益な参考書である。行文も簡明平易であるから、教職課程をとっている大学の学生諸君にも推薦したい良書である。

本書は、四章からなっているが、この問題に対する著者の解決意見が述べられているのは第三章、第四章である。各章の要点を摘記して所感を述べてみよう。

第一章 対立する道徳教育の中心問題  
著者は、生活主義・徳目主義の対立を、生活経験主義・内容計画主義の対立と名称をおき換えて論じてゆく。それは、徳目主義というと、戦前の修身教育と誤

解され易いし、生活主義というと、教育学上の生活主義と同一と見られるおそれがあるからである。著者によれば、両立場の相違点は、生活を尊重するか否かが論争の中心ではなく、生活の問題から指導内容をとらえてくるか、前もって考えた道徳内容から生活の問題を見出してくるかにあるとする。そして、生活経験主義の人々は、従来の「生活指導」だけで道徳教育を貫こうとする性格をもっているのに対して、内容計画主義の人々は、育成しようとする道徳を、計画的に考えて導く教育活動が必要であるとする点に両者の相違があるとする。然し、この生活経験主義の中に、政治的イデオロギーを背後にもった論者がいるが、これは教育学的立場から逸脱するもので、徒らに現場の教師を混乱に導くものであるから、かような生活主義道徳論は除外して考えたと述べているが、これは賢明な態度であると思う。一部生活主義道徳論をなすものの中に、今日の道徳教育を指して「独占資本主義のための道徳教育」とか、「ブルジョア道徳の擁護」とかの言葉で反対し、資本主義の矛盾を批判する能力を養うのが真の道徳教育である、と考えているイデオロギー的教育説があるが、かような生活主義道徳論は論外におくがよい。

次に問題の出発点となる「生活指導」の性格を述べ、所謂、間接的方法である生活指導だけでは、真の道徳教育の目的を達成することはできない。生活指導の外に直接的方法ともいふべき道徳の指導が必要なることを述べている。道徳教育が、生活指導だけでは十分に果せない理由を著者は次の如く挙げている。

- 一、生活指導は、その行為に強い反省は与えるが、反省を一般化することに十分でない。
- 二、生活指導は主体的関連による高い理解は与えるが、知る働きを意味的関連で深めるに十分でない。
- 三、知る、と、行なう、との間の溝を乗り越えなければならないが、単に生活指導だけでは不十分である。

第二章 両主義の方法論的根拠とその見方の問題点  
一、生活経験主義の主張点とその問題点

一、具体的生活問題を持っている点は強みであるが、教育的計画性は退後する。



ロ、徳目主義に陥らない点は強みであるが、そのために失うものがある。  
二、内容計画主義の主張点とその問題点

イ、計画によってとらえられる子供の生活に限界がある。

ロ、計画のための目あてと、徳目の客観性への誤解がある。

ハ、計画の充実をはかると、その反面に教師の自主的可能性の減退がある。

三、欧米の道徳教育にみられる両要素

ここでは、アメリカ・西ドイツ・フランス・イギリス等欧米諸国に於ける道徳教育の状況を著者自ら視察した結果に基いて述べているが、これらの諸国に於ても、生活経験主義と内容計画主義（徳目主義）とが対立しているが、現場ではなんらかの方法で、これを統一し、結びつける努力が払われていることを具体的に述べている。

第三章 道徳教育論で考えるべき「生活」と「計画」

この両者の対立を統一して解決しようとするのが、この章の主眼である。著者によれば道徳教育に於て、最も重要な「生活」と「計画」というものに対して、多くの人々が一方的解釈をして、その理解が十分でなかったところに深刻な対立が生れたとする。本来わが国の道徳教育が昭和三十三年までとってきた方針、即ち「生活指導」だけで貫くという構想は、デューキの思想に理解を欠くアメリカの進歩派の経験主義的教育思想に基づいているものであるが、その後にとられた「道徳」の時間特設の構想は、理論的には、その修正である、という意味をもっていると判断する。然し、アメリカに於て経験主義教育の指導原理を与えているデューキ自身は、必ずしも体系的な指導や計画性の必要を否定しているわけではない。彼の主張の重点は「その指導内容の観念関係から考えられた体系や計画が、そのまま指導の方向や方法をきめるものであってはならないということ、その計画や体系は実際にたどるべき方向にたいして仮説としての性格を持つものに過ぎないということである。そしてそれは、人間の行為の決定は、観念の絶対的形成によるものではなく、環境の場の関連性から主体的決意によってきめられるものである。」と主張しているから、生活のなかで道徳を考えての指導体系は必要であると述べ、デューキの著書を引用して、「場」(Situation)の問題を中心

から、両者の正しい位置づけを行い、これの統一をしていくのである。その内容の項目をあげると、

一、道徳教育で扱うべき真実の「生活」

イ、子供の真実の「生活」とは如何なるものか。

ロ、行為は必要への反応である。

ハ、道徳の時間に真実の「場」をとらえるには、どうしたらよいか。それには自分の置かれた「生活の場」で考えさせること。書くことで内面的反省をさせること。生きた問題を随所にとらえること。個人との結びつきを考えること。などをあげている。

二、道徳教育でとるべき「計画」

イ、計画でとり上げる道徳のもつ意味的関連は、地図としての役目である。  
ロ、指導計画は仮説的のものである。

ハ、生活のなかで、道徳の意味を考えての指導体系を樹てること。

第四章 両主義の立場を統一する実際的方法

道徳教育に於ける「生活」と「計画」との統一は、他の教科とは違った独特な性格を持っている。行動の行われている子供の生活の「場」は絶えず変化している。どんな計画も修正も一たび固定すれば、流動する生活への適合力を欠き、失敗する性格のものである。そしてまた子供の生活をよくとらえるためには、教師は子供の態度や言動のこまかな観察をして、彼らの心の動きを知ることが大切である。即ち、窮極、は教師の自主的弾力的な指導が大切である、と述べ、その具体策を次のように挙げる。

一、両主義を結びつける道徳教育の計画

イ、時間配当上の工夫

ロ、自主的主题でとり入れる生活課題

ハ、計画主題の選び方

ニ、必要に応じての実態調査

ホ、全職員による自主的計画

ヘ、資料での充実と、計画での融通性

ト、地域社会とともに育てる道徳的計画

二、両主義を結びつける展開の実際

イ、展開前に主題の検討と修正

ロ、導入でまづ生きた問題をとらえる。

ハ、資料による導入は必ず生活の反省へ

ニ、生きた資料の補充と実情調査

ホ、展開を生活と結びつけるための工夫

ヘ、生活ノートの活用

以上のように、指導の実際面に於ける、両者を結びつける方法を具体的に述べている。

(B6版 一九六五年九月発行 初版 一七二頁 明治図書 道徳シリーズ2  
定価三六〇円)